# 古代漢語借用語と日本語の系統論

野田　恵剛

## Ancient Chinese Loanwords in Japanese and their Implications for Japanese Genealogy

Keigo NODA

This paper argues that there is a fair amount of ancient Chinese loanwords in Japanese, borrowed presumably during the *Yayoi* (ca. BC 500~AD 250) period and this has some implications for Japanese genealogy. Remains of these ancient loanwords can be detected in so-called *kun'yomi* (Japanese reading) words, which are generally thought to be of Japanese origin. In order to search for true genealogy of Japanese, we must sift through Japanese words and eliminate those Chinese loanwords as much as possible.

**Keywords:** ancient Chinese; Chinese loanword in Japanese, *kun'yomi*, Japanese genealogy

### 1. はじめに

日本語の訓読みと音読みを比べると両者が似通っている場合が少なくない。たとえば、「竹」は訓読みが「たけ」で音読みが「チク」、「絹」は訓読みが「きぬ」で音読みが「ケン」、「役」は訓読みが「やく」で音読みが「エキ」、「君」は訓読みが「きみ」で音読みが「クン」であるといった具合である。そして一般に訓読みの「たけ」はヤマト言葉、音読みの「チク」は漢語であるとされる。このようなヤマト言葉と漢語の類似性は全くの偶然であろうか。それとも両者に何らかの関係を認めるべきであろうか。上の例をローマ字書きすれば、take: tiku, kinu: ken, yaku: eki, kimi: kun となって両者の類似性は明らかである。両者は子音の骨格はほぼ同じで母音が異なっている。もっとも kimi: kun では m と n の違いがある。一般に訓読みは和語、音読みは漢語であると考えられており、和語は古来より日本語に存在する語であるとされている。しかし日本語と漢語が比較言語学的に親縁関係がないことを考えるとこれはきわめて奇妙な偶然の一致というほかはない。ここから得られる結論はむしろいわゆるヤマト言葉の中には漢語の借用語が混じっているのではないかということである。しかし不思議なことに「梅」、「馬」などごく少数の語を除けば古い漢語の借用語を指摘する声はほとんどあがっていない。大陸と

の交渉がほんのわずかの文物とそれを表す語に限られていたとは到底考えられない。これ以外にも数多くの文物の流入とそれに伴う借用語があったと考えるのが自然である。

**2. 漢語借用語と日本語の訓読みとの音の対応**

日本語における古い漢語の借用語を最初に指摘したのはスウェーデンの中国語学者カールグレンである。かれは前述の「馬」「梅」「絹」「竹」をはじめ「鎌」(かま)、「麦」(むぎ)、「熱」(なつ)、「松」(すぎ)、「琢」(とぐ)、「剥」(はぐ)などおよそ 20 の借用語を認めた。これに対し亀井孝(1984)が反対し、亀井はカールグレンの言う借用語は梅、馬、絹、郡(くに)の 4 つを除いて本来のヤマト言葉であるとした。しかし、亀井の態度は中途半端である。4 つが借用語であると認めるならばそれがいかに和語に入ったのか、カールグレンのあげる語以外の借用語はなかったのかという疑問がすぐに浮かぶはずだからである。

最近、小林昭美(あきよし)(2007)はカールグレンの説を補強する大量の証拠を発見した。これには「奥」（おく）、「南」（みなみ）、「墓」（はか）、「時」（とき）などが含まれ、「やまとことば」（小林の表現では「弥生語」）は決して純粋なものではなく多くの古代漢語からの借用語を含んでいることを明らかにした。この論文は今後の日本語史の研究を方向づけるといってよいほど刺激的で、説得力に富み、多くの発見を含んでいる。筆者はすでに小林の説を比較言語学的に考察した論文を発表したが(野田 2009)、本論の前半部はいささかそれと重複するところがある。

以下に古代漢語とヤマト言葉の代表的な音の対応（音変化）の例をあげる。以下の例の古代漢語音は『字通』および藤堂・加納編『学研新漢和辞典』(TA としるす)から引用した。

古代漢語音と日本語の訓読みとの対応

A.古代漢語の韻尾（語末）の m, n>m, n と ng の一部>m

-m, -n の場合、和語が m を取るか n を取るかに決まりはないようである。またもちろん和語は子音終わりを許さないので支えの母音がつけられた。

・古代漢語-m>和語-m

闇　アン・やみ(an: yami< əm)

占　セン・しめ(sen: sime< tjiam)

南　ナン・みなみ(nan: mi-nami<nəm)

・古代漢語-m>和語-n

金　キン・かね(kin: kane< TA kıəm)

兼　ケン・かね(ken: kane< hyam)

店　テン・たな(ten: tana< tyəm)

・古代漢語-n>和語-n

絹　ケン・きぬ(ken: kinu< TA kiuan)
殿　デン・との(den: tono< dyən)
・古代漢語-n>和語-m
肝　カン・きも(kan: kimo< TA kan)
簡　カン・かみ(kan: kami< kean)
君　クン・きみ(kun: kimi< giuən)
困　コン・こまる(kon: kom-aru< khuən)
純　ジュン・すみ(zyun: sumi< zjuən)
・古代漢語-ng>和語-m
様　サウ・さま(sau: sama< siang)
公　コウ・きみ (kou : kim-i< kong)
霜　サウ・しも(sau: simo< siang)

B. 古代漢語-ng>和語-g,-k
泳　エイ・およぐ(ei: o-yogu<*hyuang)
往　オウ・ゆく(ou: yuku< hiuang)
奥　アウ・おく(au: oku< uk)
影　エイ・かげ(ei: kage< yang)、cf. 景[TA kıǎng]
勝　ショウ・すぐる(shou: suguru< sjəng)
性　セイ・シャウ・さが　(sei, syau: saga< sieng)
塚　チョウ・つか(tyou: tuk-a< TA tıung)
羊　ヤウ・やぎ(yau: yag-i< jiang)
楊　ヤウ・やぎ、やなぎ(yau: yag-i<*jiang)
相模 さがみ(sag-a-mi< siang-ma)

C. 古代漢語-t, -n,-m>-t, -r
擦　サツ・する(sat-u: sur-u< TA tshat)
没　ボツ・うもる(bot-u: umor-u< muət)
管　クヮン・くだ(kwan: kud-a< kuan)
玄　ゲン・くろ(gen: kur-o< hyuen)
申　シン・さる(sin: sar-u< sjien)
音　オン・おと(on: ot-o< iəm)、、
嫌 ケン・きらひ(ken: kir-ahi< hyam)
肩　ケン・かた(ken: kat-a< TA kǎn)、
断　ダン・たつ(dan: tat-u< duan)

D. 子音の重複

鑑　カン・かがみ(kan: ka-gami< keam)

進　シン・すすむ(sin: su-sumu < tzien)

限　ゲン・かぎる(gen: ka-gir-u <heən)

続　ゾク・つづく(zoku: tu-duk-u <TA diuk)

南　ナン・みなみ(nan: minami<*na-nami< nəm)

E. 音位転倒

稔　ネン・みのる(nen: min-oru <njim)

眠　ミン・ねむる(min: nem-uru<men)

F. 語頭音の脱落

犬　ケン・いぬ(ken: inu< TA khuən)

今　キン・いま(kin: ima< kiəm)

根　コン・ね(kon: ne< kən)

恨　コン・うらむ(kon: ur-amu< hən)

合　ガフ・あふ(gahu: ahu< həp)

赤　セキ・あか(seki: aka< thjyak)

置　チ・おく(ti: oku< tjiək) cf. 直(tyoku)

山　サン・やま(san: yama<TA săn)

G. 母音添加(前置)

妹　マイ・いも(mai: i-mo< muəd)

未　ミ・いまだ(mi: i-mada< miuət)

没 ボツ・うもる(botu: u-mor-u< muət)

美　ビ・うまし(bi: u-ma-si< miei)

梅　バイ・うめ(bai: ume< TA muəg)

馬　バ・うま(ba: u-ma<mă)

弟　テイ・おと(tei: o-to< dyei)

泳　エイ・およぐ(ei: o-yog-u<*hyuang)

H.　s (sh)と t の交替

作　サク(saku)・つくる(tuk-uru< tzak)

散　サン(san)・ちる(tiru< san)　cf.撒[sat]

常　ジャウ(zyau)・つね(tune< zjiang)・とこ(toko)

辛　シン(sin)・つらし(tur-a-si< TA sien)

I. s(sh)と k の交替

之　シ(si)・これ(kore< tjiə)

子　シ(si)・こ(ko< tziə)

辛　シン(sin)・からし (kara-si< TA sien)

神　シン(sin)・かみ(kami< djien)

J. 意味の転移

これは本来の漢字の読みから離れて別の漢字の読み方が適用されたものである。まず、「くに(kun-i)」は「国」の本来の読み方でなく、「郡」[giuən]（グン）の字の読み方が適用されたものである。「かみ(kami)」(紙)は本来「簡」[kean]（カン）の字の読み方で、もとの意味は「木簡」「竹簡」などに見られるように字が書かれる材料であったが、後に「紙」の読みとして使われた。「やぎ(yag-i)」はもともと「羊」[jiang]（ヤウ）「ひつじ」を表したようである。「すぎ(sugi)」はもともと「松」[TA siong]を表した。「やぎ、やなぎ」は本来「楊」[TA yiang]（ヤウ）の字の読みであったようである。また、「さけ」（酒）の本来の字は 「酢」[dzak]（サク）だったようであるが、これは現在では「す」の読みが当てられている。「はか」の字「墓」の想定される古代漢語音は [TA mog]であるが、この語の語頭の m が b と交替した形*pak-a が和語に入ったと考えられる。時[zjiə]は和語の「とき」とはかけ離れているように見えるが、同系の「特」[dək]（トク）を参照すれば音の由来は首肯できよう。

**3. 日本語の系統論**

ここでは日本語の系統論を本格的に論じるつもりはないが、古代漢語借用語と日本語の系統論との関わりを考えてみたい。そこで村山七郎と小泉保を取り上げてその説を検討する。まず村山は日本語が南方系の要素を基底としその上にアルタイ語的要素が加わったとする立場で以下のような例を検討している。

「ナミ」: 村山は、日本語のヌグ(脱ぐ)は奈良時代にはヌクであったことを指摘し、その語源について、nuku の語幹は nuk-であり、古くは*luk-であったとする(村山・大林(1973:165))。その際類似の音変化を示す例として日本語の nami「波」をあげ、対応するツングース語の例をあげている。エヴェンキ語 lāmu「海」、オロッコ語 namu「海」, lamu「波」、満州語、ナーナイ語 namu「海」。これらは一見素晴らしい対応例に見えるが、「波」が漢語借用語であるとすると様相は一変する。小林によれば、日本語の「波」(nami)は漢語の「浪」[lang]に由来する漢語借用語である。上の規則 A にあるように古代漢語の語末の ng の一部は日本語では-m で受容されたので*lang> *lami>nami のような変化が考えられる。古代漢語の l-が日本語に入るさいに n-に変化する例として、小林は「梨」

[TA lıer]>nasi、「流」[TA lıog]>nag-aru、「練」[TA lān]>neru をあげている。

「クラ」と「カリ」: 村山 (1974:105)は、クラ(暗) は原始インドネシア語*gəlap「暗闇」（トバ・バタク語 golap「暗闇」、マレー語 gəlap「暗い、暗闇」）に対応し、クロ(黒)はその派生語と見る。しかし、有名な例であるモンゴル語、トルコ語の kara「黒い」とは第 1 音節の母音がちがうので同源と見ることはできないという。さらに、村山(1973:124)では服部四郎の日本語とアイヌ語との比較をあげて、アイヌ語の kur「影」、niskur「雲」(nis「天・空」)、kunne(< kur+ne)「黒い」、ekurok「暗い」の語根 kur と日本語 kuro「黒」、kura「暗」、kuru「暮」の語根 kur が形も意味も似ていると服部が言っていることを紹介しているが村山はこの比較には否定的である。さらに、村山(1974:189)によれば、カリ(雁)は古代トルコ語 kaz「がちょう、雁」を連想させるとして、レセネンの辞典によって、中期トルコ語 kāz、ウイグル語 kaz、ヤクート語 xās、さらには満州語 garu、エヴェンキ語 gārə を比較する。一方小林によれば、日本語の「黒」(kuro)は「玄」[TA ɦuān]から、「雁」は古代漢語[TA ngăn]からで、いずれも上記 C の規則によって語末の-n>-r の変化が起きたと考えられる。

「イヌ」と「アマ」: 村山(1974:51)によれば、「犬」はエヴェンキ語 ŋinakinï、オルチャ語 inda、ナーナイ語 enda、満州語 indaxūn と関連付けられ、ここから祖形として*ŋïnda-が復元される。そしてこれが*ŋïndu > inu と変化したとする。また、村山(1974:112)は「甘い(ama)」と「味」を関連付け、モンゴル文語 amta(n) 「味」、満州語 amtan「味」、ツングース・エヴェンキ語 amta「味」と比較している。しかし小林によれば「犬」(ken)は古代漢語借用語であり、上記の規則 F のように[TA khuən]の語頭の k が脱落した結果である。同様に ama も甘[kam]の語頭の k が脱落したものである。

「ハマ」と「シモ」:村山(1974:172)によれば、ハマ（「浜」）は*pampa にさかのぼるとされ、これはタガログ語 pampaŋ「勾配のゆるやかな砂の岸、浜辺」と比較されている。また村山(1974:177)はシモ（「霜」）について (p.179f.)、J. ベンツィングが「雪」を表すツングース系の単語を以下のように示しているとして、満州語 nimanggi、ナーナイ語 semata、オルチャ語 simata、オロッコ語 simata、エヴェンキ語 imanna 等をあげ、祖形として*ximansa をたてている。そして日本語の simo も多分*ximan にさかのぼるだろうとする。しかし小林によれば、「浜」も「霜」も漢語借用語である。「浜」の古代漢語音は[TA pien]であり、語末に-n をもち、「霜」の古代漢語音は[siang]で語末に-ng をもつ。そして上の規則 A にあるように、古代漢語の語末の-n と-ng の一部は日本語では m として現れることがあるのでこの場合はそれぞれ hama (pama)、simo になったと考えられる。

以上村山の説は一見したところオーストロネシア語やツングース語との関係を思わせ

るような例であるが、その例がもし古代漢語借用語であるとすると残念ながらいっぺんにその輝きを失ってしまう。

一方、小泉(1998)は慎重な学者らしく海外に親縁語を求めることはせず、日本語内部でいわゆる内的再建によって古い日本語の姿を探ろうとする。かれは柳田国男の「方言周圏論」にもとづいて、東北や九州・沖縄など中央から離れた辺境に古形が残っているとしてこれらの方言の比較を通じてかれのいう「縄文語」の姿を浮かび上がらせようとする。その際小泉(1998:141f.)は東北方言およびそれに似た出雲方言を重視し、これらの方言に古形が残存しているとの信念をいだいて比較再建をおこなう。たとえば、トンボの古形アキヅは東北方言に見られる形から*アゲ゚ンヅが再構され、これが縄文語の形だとされる。(ここでマルのついたゲは半有声音を表し、ンヅは前鼻音化音[ⁿdu]を表す。)そして「東北方言の子音は原日本語のすくなくとも縄文後期の音形をよく保持していると言えよう」と言い切る。(p.155)さらに、小泉(1998:190f.)では、秋田、宮城、出雲の方言形を用いて、「足」、「息」、「歌」、「枝」、「桶」、「肩」、「酒」、「玉」、「波」、「鼻」、「窓」、「山」、「輪」、「黒」、「首」、「水」、「影」の裏日本縄文語の基底形（祖形）を再構する。その結果は、「*アシ」、「*エギ」、「*ウダ」、「*エンダ」、「*オゲ」、「*カダ」、「*サゲ」、「*タマ」、「*ナミ」、「*ファナ」、「*マンド」、「*ヤマ」、「*ワ」、「*クロ」、「*クンビ」、「*ミンジ」、「*カンゲ」となってきわめて東北方言に近い形である。もしこれらの単語が純粋なヤマト言葉であるならば、小泉の考えもあるいはある程度の妥当性があるかもしれない。しかし、これらの単語のうち「桶」、「肩」、「酒」、「玉」、「波」、「山」、「黒」、「影」は漢語借用語である可能性が高い。すなわち、桶 oke < TA thung、肩 kata < TA kăn、酒 sake < 酢 TA tshag、玉 tama < 弾 TA dan、波 nami < 浪 TA lang、山 yama < TA săn、黒 kuro < TA ɦuān、影 kage < 景 TA kıăng であり、それぞれ上述の規則が適用される。またこれ以外にも漢語起源が疑われる単語がある。さらに p.188f.では、縄文語では母音の無声化がいちじるしく、たとえば「ススキ」[sɯsɯki]では後の「ス」は有声のひびきが聞こえるが、前の「ス゚」は無声化しているので「ウ」の母音が聞きとれない。そして無声母音につづく子音も無声化するとして、青森方言の「舌」は「ス゚タ」となり、無声子音も語中に現れることになるとしている。しかしながらこの語は、訓 sita: 音 zetu が示すように両者の子音の骨格の類似性は著しく、古代漢語借用語(TA diat)と考えざるをえない。

弥生時代の開始年代は石川(2010:52-53)によれば、「国立歴史民俗博物館(歴博)が 2003 年に『放射性炭素年代測定値を年輪補正すると、従来の紀元前 4，5 世紀からさらに約 500 年遡る』と発表して以来賛否両派の議論が続き、いまだに決着していない。筆者は、従来の年代値は研究史上の経緯から抑え気味のものであり、いっぽう歴博の主張する前 10 世紀は古すぎるとみる」として、「おおよそ紀元前 7，8 世紀から」(p.82)であるとする。しかし日本語の様相を大きく変える大量の漢語借用語の流入・浸透を考えると、単

なる渡来人の到来というよりもむしろ、稲作や青銅器・鉄器といった特殊な技術をもった人々が到来し、かれらは技術力の優位さによって原住民（縄文人）を圧倒し、それとともにその言語である古代漢語が日本語に流入し、日本語を大きく変質させていったと考えた方が言語面だけでなく考古学や歴史学の成果とも整合性があるのではないだろうか。もし上述の「桶」、「肩」、「酒」などが古代漢語借用語であるとすれば、それらは弥生時代に日本語に入って来たものであろう。当然それらは紀元前 1000 年以前の縄文時代(小泉 1998:18)にさかのぼることはできないし、縄文語の証拠として復元形に使うことはできない。もし縄文語説に固執するならば、それは古代漢語借用語を取り除いた残りの語について検証すべきである。また、小泉の縄文語はあまりにも東北方言に依存しすぎているという印象をぬぐえない。古代漢語の借用語は有声・無声の区別がはっきりしないので、たとえば、「肩」は古くは kada であった可能性は否定できないけれども、現代語では kata の語中の-t-は無声であるので、-d->-t-という音変化を想定しなければならないが、母音間で有声音が無声化するという、一般の音変化の規則に逆らう規則を設定せねばならずかなり不自然で無理がある。また「カゲ」の前鼻音化した「*カ゛ゲ」を原形とみているが、もしこれが漢語借用語であるとすると「景」(TA kıǎng)は kage として日本語に入ったはずであり、どこにも前鼻音化は見当たらないし、実際標準的な現代日本語でも kage であって前鼻音化現象は見られない。したがって東北方言の前鼻音化現象の方が後代の変化であると考えるのが自然であろう。同じことが琉球語についてもいえる。小泉(1998:264f.)には「陰（=影）」（カゲ）の例があがっている。上述のようにこの語が漢語借用語だとするとこの語は琉球縄文語の例にはなりえない。小泉(1998)では琉球語の例が少ないので断定するのは難しいが、先の東北方言から復元した例のように、かれのいう縄文語に多数の漢語借用語が含まれているとすれば、琉球縄文語の設定自体もあやしくなってくる。

## 4. 終わりに

溝口(2011)によれば、人類学的には縄文人は南方起源であり、弥生人は北方起源であるという。もしそうなら言語の面でもこの方向で研究を進めるのが順当であろう。すなわち基層語としては南方系の言語、たとえばオーストロネシア語やオーストロアジア語が縄文語あるいはそれ以前の言語として考えられるし、その上に北方系の言語、たとえばツングース語や朝鮮語などがかぶさって日本語(弥生語?)が成立したと考えられる。(cf.小泉 1998:258f.)これにいわゆる渡来人の漢語が重なってヤマト言葉は成立したとみられる。日本語がこのように重層的な言語であったとすると日本語の様相がたとえば縄文語とヤマト言葉ではたいへん変わったものになっているのは当然である。したがってその歴史や系統関係の解明がすんなりといかないことは容易に理解できる。ここに例としてあげた村山の研究はオーストロネシア語とツングース語を基層として取り入れることで方向としてはいい方向に向かっていると思う。しかし残念ながらその比較は表面

的で断片的なものにとどまっているが、空間的、地理的隔たりの大きさと資料の制約から現段階ではやむをえないであろう。比較において大原則は「基礎語彙における規則的な音の対応の存在」である。断片的な類似性はどの言語を比べても 5%程度はあるといわれているので、ランダムに類似の単語を選び出して比較し音法則を作り上げるのは方法論にかなっていない。我々はヤマト言葉から古代漢語借用語を１つ１つ取り除いて残ったものの中からさらなる古層への探求を始めなければならない。我々はともすれば見かけ上の類似性に気をとられて安易に比較を行ないがちである。よく知られているようにヒッタイト語の解読の初期にはこの方法がうまく働いた。しかし一般に親縁関係が不明な言語を比較しようとするときには断片的な類似性に満足すべきではない。ともかく今後の日本語の歴史的研究・系統論においては古代漢語借用語の問題を考慮に入れずに進めていくことはできなくなったことは確かであろう。

## 参考文献


石川日出志(2010) 『シリーズ日本古代史①　農耕社会の成立』（岩波新書）

大野晋他編(1974)『岩波古語辞典』（岩波書店）

亀井孝(1984) ‘Chinese borrowings in preliterate Japanese’『亀井孝論文集３』（吉川弘文館）

小泉保(1998) 『縄文語の発見』（青土社）

小林昭美(2007)「「やまとことば」のなかの中国語からの借用語」『大正大学研究紀要　人間学部・文学部』92 号

小林昭美ウェブサイト「日本語千夜一話～古代編～」http://www3.ocn.ne.jp/~ocra/

白川静(2006) 『字通』（平凡社）

高島俊男(2001)『漢字と日本人』（文春新書）

藤堂明保・加納喜光編(2008)『学研新漢和大字典』（学習研究社）

野田恵剛(2009)「奈良朝以前の日本語の漢語借用語」『アリーナ』(中部大学)第 6 号（風媒社）

溝口優司(2011)『アフリカで誕生した人類が日本人になるまで』（ソフトバンク新書)

村山七郎、大林太良(1973) 『日本語の起源』（弘文堂）

村山七郎 (1974) 『日本語の語源』（弘文堂）